

## コラム 76— 大東亜戦争における米軍とソ連軍の戦争犯罪

### <米軍の日本兵捕虜の扱い等>

大西洋単独無着陸飛行を始めて成功させたことで有名なアメリカの飛行家**チャールズ・リンドバーグ**（写真）は、日記の中で「アメリカ人が文明人であることを主張する理由がなくなる」ような、米軍兵士の日本兵捕虜に対する数々の蛮行を述べています。米兵による日本兵捕虜や傷病兵に対する拷問・殺害、死体の陵辱、死体からの金歯の抜き取りなどは日常茶飯事でありました。以下、日記から要約・抜粋します。



リンドバーグ

「日本兵士殺害に関する将軍の話・・・実践参加経験がないまま帰国する軍曹が、せめて1人だけでも日本兵を殺したいと不平を漏らした。偵察隊に捕らえられた1人の日本兵捕虜が、軍曹の前に引き立てられた。軍曹は言った。『俺はこいつを殺せないよ！ やつは捕虜だ。無抵抗だ』、『戦争だぜ。野郎の殺し方を教えてやる』と偵察隊の1人がそう言うと、日本兵に煙草と火を与えた。煙草をすい始めたところに、日本兵の頭部に腕が巻きつき、喉元が一方の耳元から片方の耳元まで切り裂かれた。このやり方全体は、話をしてくれた将軍の全面的な是認を受けていた。」（6月21日）

捕虜の殺害ゲームを、軍の責任者である将軍が是認していたというから、まさに組織的戦争犯罪であります。さらに続きます。「我が軍の将兵は、日本軍の捕虜や投降者を射殺することしか念頭にない。日本人を動物以下に取り扱い、それらの行為が大方から大目に見られているのである。我々は文明のために戦っているのだと主張されている。ところが、太平洋における戦争をこの目で見れば見るほど、我々には、文明人であると主張する理由が、いよいよ無くなるように思う。」（7月13日）

捕虜の殺害ゲームを、軍の責任者である将軍が是認していたというから、まさに組織的戦争犯罪であります。さらに続きます。「我が軍の将兵は、日本軍の捕虜や投降者を射殺することしか念頭にない。日本人を動物以下に取り扱い、それらの行為が大方から大目に見られているのである。我々は文明のために戦っているのだと主張されている。ところが、太平洋における戦争をこの目で見れば見るほど、我々には、文明人であると主張する理由が、いよいよ無くなるように思う。」（7月13日）

「我々がもし日本兵の歯をもぎとったり、ブルドーザーで遺体を穴に押しやり、さらった土をかぶせてやったりする代わりに、人間にふさわしい埋葬を営んでやるのが出来るのであれば、私は我が国民性にもっと敬愛の心を抱けたに違いない。ブルドーザーで片付けたあとは、墓標も立てずに、こう言うのである。『これが黄色い奴らを始末するたった1つの手さ』と。」（7月21日）

「山道の片側にある爆弾でできた穴の縁を通り過ぎる。穴の底には5人か6人の日本兵の死体が横たわり、我が軍がその上から放り込んだトラック1台分の残飯や廃棄物で埋もれていた。我が同胞が拷問によって敵を殺害し、敵の遺体を爆弾で出来た穴に投げ込んだ上、残飯や廃棄物を放り込むところまで墮落するとは、実に胸糞が悪くなる」（7月24日）

また、マサチューセッツ工科大学教授**ジョン・ダワー**は、著書「容赦なき戦争—太平洋における人種差別」（平凡社ライブラリー）において、日本兵捕虜の扱いを次のように述べています。

「太平洋地域担当の従軍記者エドガー・ジョーンズが、1946年の『アトランティック・マンズリー』誌に『われわれは捕虜を容赦なく撃ち殺し、病院を破壊し、救命ボートを機銃掃射し、敵の民間人を虐待・殺害し、傷ついた敵兵を殺し、まだ息の有る者を他の死体とともに穴に投げ入れ、死体を煮て頭蓋骨をとりわけ、それで置物を作るとか、または他の骨でペーパーナイフを作

るとかしてきたのだ』と書いている。ジョーンズはさらに、標的の日本兵がすぐに死ぬことがないように、火炎放射器の炎を調整するというような行為にまで言及している。」

さらに、アメリカの作家ジョージ・ファイファーは、著書「天王山—沖繩戦と原子爆弾」（早川書房）において、「アメリカ軍の残虐行為」として、太平洋戦線と同様に、沖繩でも多くの日本兵が、投降したにもかかわらず殺されたことを述べています。ファイファーは、元海兵隊員の証言を集め、事実関係を明らかにしています。その中の一部を抜粋すると「日本兵は海兵隊には、降伏しないことが私にはわかっていた。降伏したかったら、陸軍の方へ行っただろう。海兵隊員の99パーセントが彼らを撃ち殺しただろう。野蛮な人間もいた。日本人の歯で作った腕輪は、彼らの歯を抜き取らなくては作れない。」

捕虜や降伏者に対する虐待・虐殺だけでなく、日本兵の所持品は、あらゆるものが土産品として略奪されました。

### <ソ連軍の戦争犯罪>

ソ連軍による攻撃は、終戦の8月15日以降も継続され、北方四島の占領を確実にした9月5日まで行われました。戦後の、ソ連軍による戦争犯罪は数多くあり、以下、代表的なものを記述します。

8月20日、終戦5日後ソ連軍が、樺太を占領するため、樺太の真岡市の市街に艦砲射撃をしながら、上陸してきます。樺太庁は8月16日に緊急疎開命令を出してはいたが、人口2万人の真岡市民のうち、まだ1万人以上が乗船待ちとなっていました。20日の未明、日本軍は真岡市内でかなりの死傷者が出ていることを知りつつも、戦闘を避けるため交戦を禁じ、停戦のための軍使を派遣しました。白旗を掲げた上等兵を先頭にして村田徳兵中尉が軍使となり、護衛兵とともに交渉に向かいましたが、ソ連兵は日本兵の武装を解かせた上で、いきなり銃口を日本兵に向けて乱射しました。さらに、山へ逃げようとする民間人を背後から軽機関銃を乱射し、このとき、わずか2週間で住民兵士ら約4,300人が虐殺されました。ある会社員は、妹を陵辱しようとするソ連兵を制止しようとして銃殺されました。また、婦女子らが仮泊していた真岡町の小学校に、ソ連兵数人が押しかけ「女を出せ」と叫んで、女性を連行しようとしたとき、70歳くらいの老女が立ち上がり、「私が行ってやる。他のものには手を触れるな」と兵士を外に追い出しました。老女は、翌日、死体となって発見されました。そのとき真岡郵便局には、22名の女性交換手が昼夜2交代で、電話交換業務を行っていました。この極限状態の中、当時電話の交換業務に当たっていた、高橋ミキを班長とする9人の班員は、その惨状を樺太各地の電話交換台に伝えた後、「みなさん、これが最期です。さようなら、さようなら・・・」との最後の言葉を残して、次々と青酸カリを飲んで自決しました。

女性に対する暴行は、ロシア民族そのものの習性かと、疑わざるを得ない蛮行を重ねたのがソ連軍でありました。ソ連兵は逃避行中の日本人避難民の中から女性を引きずり出し、集団で暴行を加えました。あるいは、避難民収容所を襲っては、若い女性を連れ去り暴行しました。満州各地の都市部でも、日本人



電話交換手慰霊碑  
「9人の乙女の像」

の住居に押し入り、家族の目の前で妻や娘に暴行を加えました。

1963（昭和 38）年、真岡郵便局で電話交換業務を行っていた、彼女たちを慰霊する記念碑「9人の乙女の像」（写真）が、北海道稚内市の公園に造られました。

また、終戦後の8月21日、樺太の大泊港から本土へ帰還する婦女子を主とする、一般人多数を載せた第2新興丸、泰東丸、小笠原丸が、ソ連の潜水艦によって、留萌沖で相次いで沈められ、1,700人以上が本土の目前で殺されました。

8月23日、終戦8日後スターリンの拉致命令「強制労働に耐えられる健康な捕虜50万人を選別せよ。捕虜を千人ずつの建設大隊に編成する。捕虜の被服や寝具は戦利品から調達する」が発せられます。

捕虜のほとんどは軍人でありましたが、技術や通訳の能力を持った軍属、満州国政府や満鉄の日本人職員、そして従軍看護婦などの女性を含む約60万人の軍民が、拉致・連行されました。それぞれが重労働に駆り立てられ、女性はソ連軍の“習性”により、多くが陵辱の対象になりました。

そして、強制的な重労働により、約6万人以上にも及ぶ日本人が死亡（写真）したのであります。「早期に捕虜を本国に送還する」としたポツダム宣言に、明らかに違反する行為であるだけでなく、ソ連の蛮行をたどるとき、まさに捕虜＝奴隷だった古代・中世の戦争を彷彿させられ、日本人にとって決して忘れてはならないことでもあります。



シベリアの日本人墓地